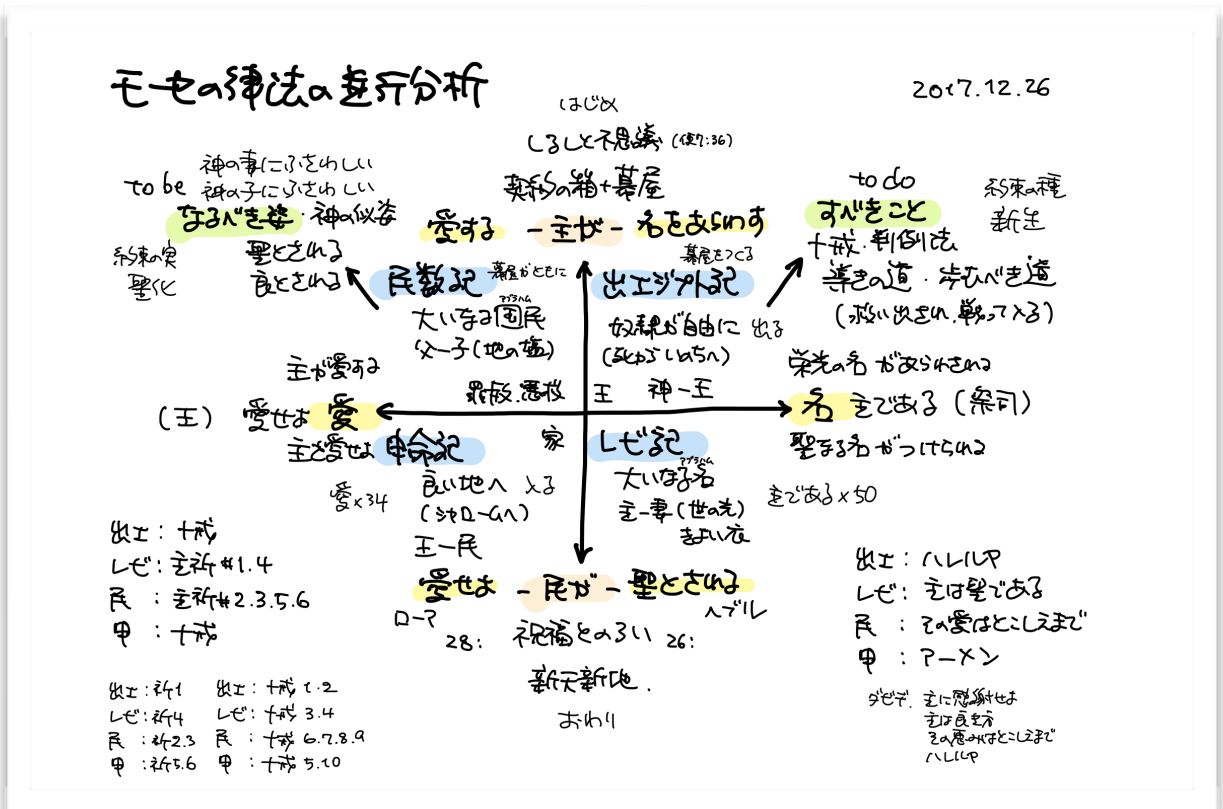




出エジプト記、レビ記、民数記、申命記  
モーセの律法の並行分析

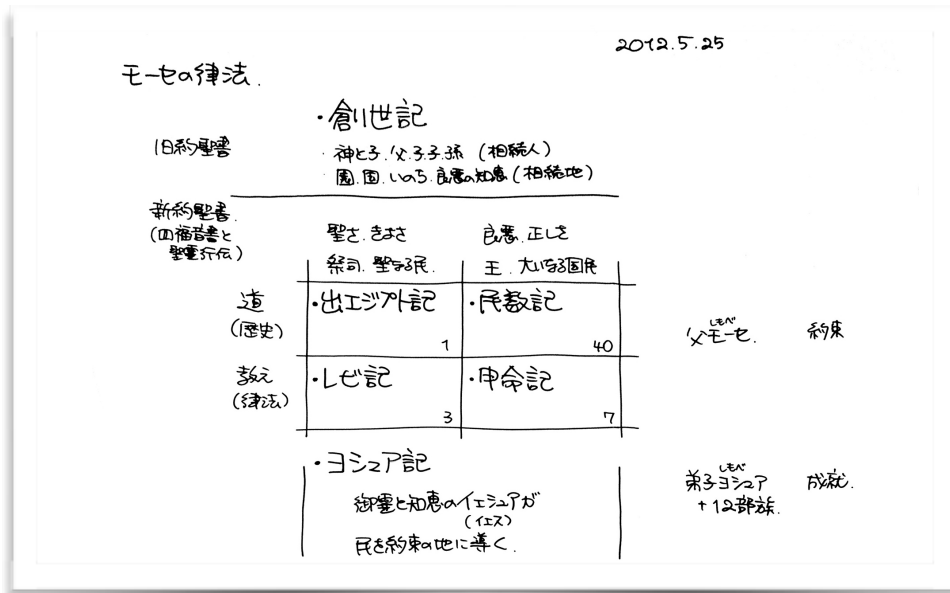


モーセの律法の並行分析をしました。モーセの律法、モーセ五書と言われる時には、創世記から申命記までなのですけれども、全体の構成としては、創世記があつて(これはモーセの時代の旧約聖書です)、モーセの時代に聖書が新たに編集されて(出エジプト記、レビ記、民数記、申命記、ヨシュア記が)書き加えられた感じです。これがモーセの時代の新約聖書です。それは、福音書が4つあつて使徒行伝があるように、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記があつてヨシュア記がある。この4つのモーセの生きていた時代の(4つ)の書物の各テーマが並行して発展していつているということを分析しているところです。

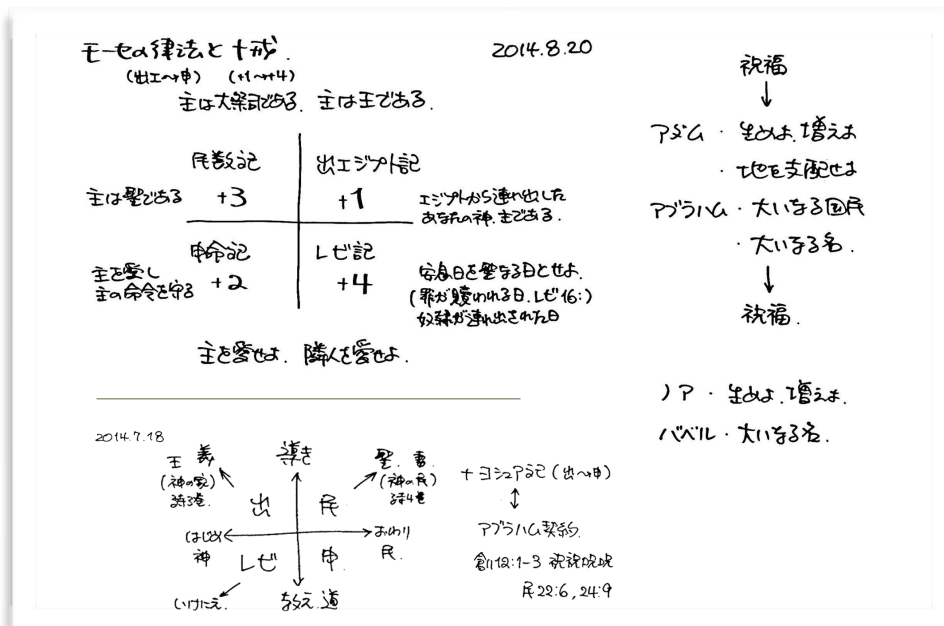
2012年の時に、この4つ、出エジプト記とレビ記の共通点、民数記と申命記の共通点、出エジプト記と民数記の共通点、レビ記と申命記の共通点ということで、2方向についての分析をしていましたが、そのあと各書物ごとに分析していった2014年に、出エジプト記と申命記、レビ記と民数記という並行もありますよねということで考え直したところでした。

それで見えてきたのですけれども、今回もう一度それを見直したところ、ちょっと一致しないところが今までありました。それで、4つの関係が特に、ほかの箇所の並行構造を見ている時に3方向とも同じように並行が大切だということはあまりないのです。どこか2つ、クロスしているの前後とか、ababとaabbとか。たて、よこ、ななめが3つとも並行していることがあまりないので、3つあればすごくガチッと固まっているような

感じでしょ。その3つの方向に並行の重さが同じようにあるという意味で、より立体的ですね。なのが4つの書物の構造なのだろうというように、今回分析し直しました。



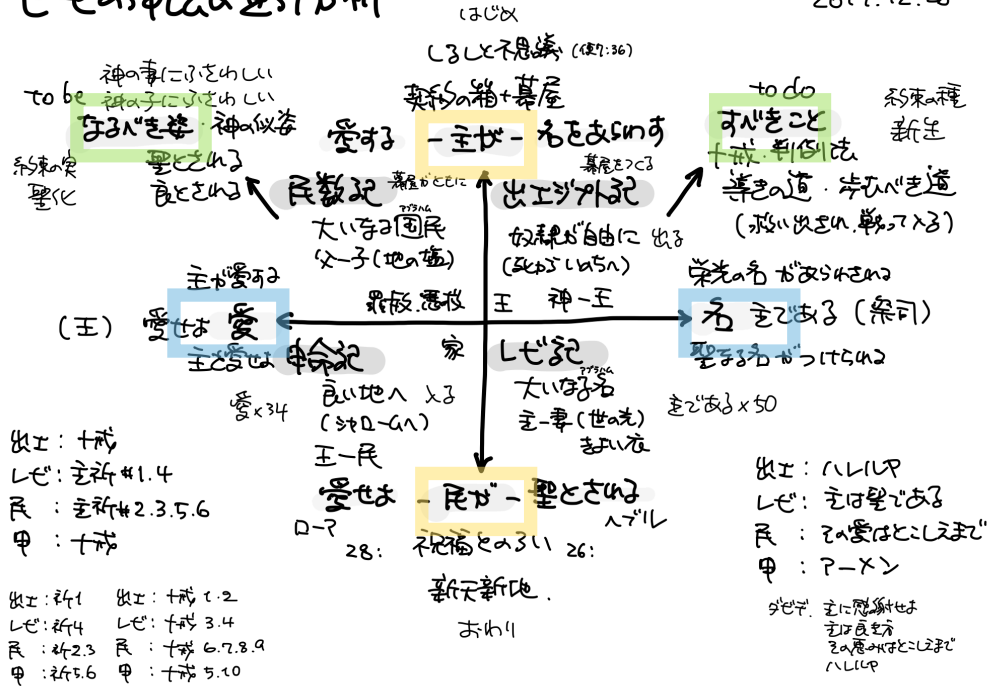
2012年のときに分析していたもの、出エジプト記と民数記は導きの歴史、レビ記と申命記が律法だろうというようなことを考え、出エジプト記とレビ記は、神様の聖さがあらわされる。それで、国が作られ、国の律法ということで、こちらは国側、王側ということが言えるのかなというように思っていたのですが、どうもそれで区別しようと思うと、区別しきれない。出エジプト記も申命記も十戒と判例法があるじゃないかと。



レビ記と民数記は、2014年の時は、聖さと考えていたのですが、民数記は聖さというのは無理があるかなあと。神様の聖さというよりは、神様の国、神様の御心、罪の赦し、悪から救う、まさに義しさだよなということで、その分析に苦労していました。

# モーセの律法の進行分析

2017.12.26



出エジプト記と申命記、レビ記と民数記の共通点がここに書いてあります。出エジプト記と民数記の共通点がここ、レビ記と申命記の共通点がこれ、出エジプト記とレビ記の共通点がここ、民数記と申命記の共通点がここに書いてあります。

まず、出エジプト記は、主が何をしたのかというのが強調されている導きと言っていたところです。レビ記と申命記は民はというのが強調されています。主が名を表してくれたエジプト記、民が聖なる神様に似て、民は聖なるものとされるとというのがレビ記。主が民を愛してくださった、子を受するように罪を赦して悪から救って、主が民を愛してくれた。それで、民は主を愛して兄弟を愛するというように、民がというほうが強調されている。主が、民が。

出エジプト記とレビ記の共通しているのは、名前と書いてありますけれど、聖であることなのですが、栄光の名が現わされる、これが出エジプト記。そして、その栄光ある名の民に聖なる名がつけられる、これがレビ記。

神様が愛してくれているその愛の導きをあらわしている民数記。それで、神様を愛さない、兄弟を愛さないと言われている申命記。

「私は主である」というような言い方はレビ記と出エジプト記です。「愛」ということばは申命記に多いのです。「主である」が50回、「愛」についてが34回、レビ記、申命記にあります。民数記には愛ということばは特に出てきませんけれども、罪を赦し、悪から救っている父が子を受するように訓練している、40年間荒野で訓練している愛の導き、愛が表れているということです。ですから、民数記も国民を作っているところからなのですから、神様の愛が表されているというのが、民数記の大きなテーマになっています。

斜めのところでいうと、出エジプト記と申命記に、十戒と判例法が書いてありますけれど、これは、すべきことというのがこの共通点です。レビ記と民数記は、こうあるべき、民は聖でなければいけない、民が義と認められる、良しとされる、聖とされる、なるべき姿というのが民数記。

すべきこととなるべき状態、それでto doとto beと書いてありますけれど、こちらが道、救い出されて良い地へ戦って入っていくこの道。それと、聖なる者、良しとされる、これが神の妻にふさわしく聖い、神の子にふさわしく良いという神の似姿になると言っているのが、こちら(民数記、レビ記)。新しくうまれる、生まれたものが聖化される、神聖と聖化。約束の種が実を結んでこの姿に変えられるということが、なるべき姿、すべきことという共通点かと思えます。

主が…と言っているほうは、契約の箱と幕屋が共通しているのです。出エジプト記のほうには、後半が十戒と幕屋の作り方、そして、実際に幕屋を作るということが出エジプト記の半分です。民数記は、その契約の箱を中心として幕屋が移動していく。それが神の国民の中心にある。その契約の箱の栄光の雲が何度も出てきます。そして、移動していくわけです。この契約の箱と幕屋を中心にして、神様はしるしと不思議を行って導いている。

そうすると、こちらのレビ記と申命記には、祝福とのろい(26、28章)、祝福とのろいが書かれている新しい天、新しい地に導かれていく。新しい者に変えられる、新しい地に導かれるという初めに導かれて、終わりに祝福されるという感じです。初め(出エジプト記)があって終わり(レビ記)。また、新しい初め(民数記)があって、新しい終わり(申命記)みたいな形になっている。

祭りでいうと、過越し(出エジプト記)、七週の祭り(レビ記)、仮庵の祭り(申命記)、40年(民数記)ということです。初めがあって、最初の完成がペンテコステ、七週の祭りは3月の祭り、3日目の完成。この完成が全世界であらわされる七週の祭りということです。初めと終わり、初めの終わりと終わりの終わりのような感じです。この二つは収穫の祭りです。レビ記と申命記に該当するところです。

初め、しるしと不思議によって導かれて、新しい天、新しい地が作られていく。出エジプト記の出来事と民数記の40年の荒野の事が、「しるしと不思議」と言われているのは、使徒行伝のステパノの証しの中にも直接書かれています。

レビ記のほうでは、民が聖とされるという話を中心でした。申命記の中では、神様を愛して隣人を愛しなさいというのが中心になっています。まるで新約聖書でいうと、ヘブル人への手紙とローマ人への手紙のようなそういうテーマですね。これが、祝福とのろいというほうです。

レビ記が主と妻、民数記は父と子。レビ記のほうは、聖い衣を着て、世の光となる。民数記のほうは、父が子を導いて訓練する、地の塩、裁きを行って義に導くという意味で、世の光、地の塩ということも言えるのではないのでしょうか。大いなる名が与えられ、大いなる国民となる、これはアブラハムの契約の祝福の成就するところです。神様が王を与え、家を作る、これはダビデの契約につながっていくと思われれます。

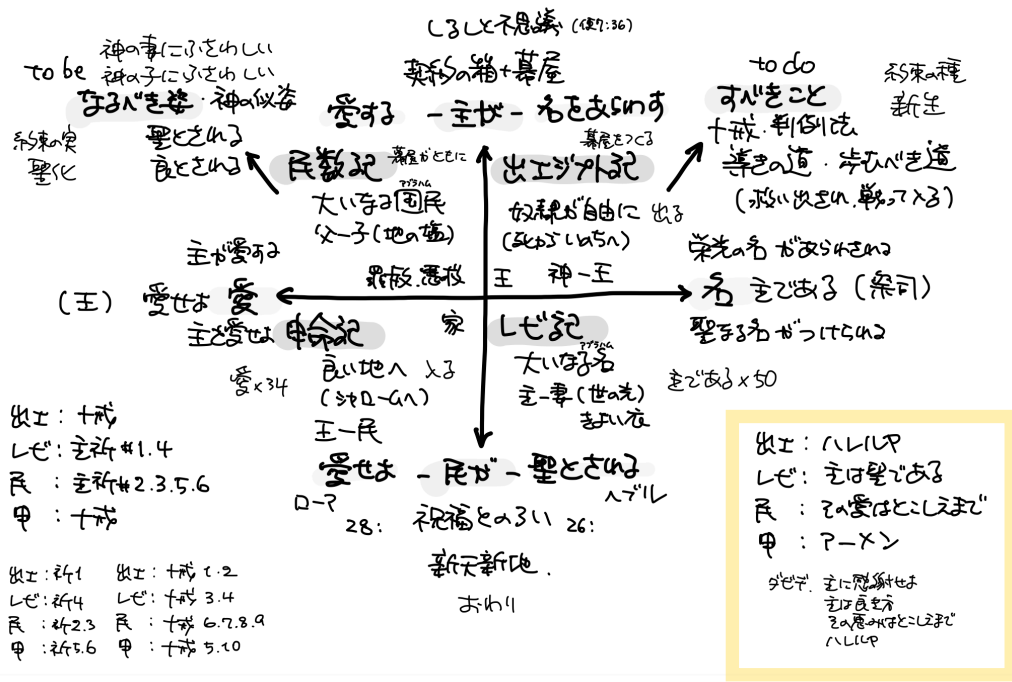




正しい相続を得られるようにというのが5番目、10番目の申命記と言えると思います。幕屋を作って、幕屋が共にいる、守られるというのが民数記ですね。

# モーセの律法の進行分析

2017.12.26



全体の流れとしてみると、ダビデの祈り、詩篇の概略、幕屋を捧げる時のレビ人が歌う歌の歌詞ですね。「主に感謝せよ、主はまことにいつくしみ深い、その恵みはとこしえまで、ハレルヤ。」という言い方がありますがけれど、その言い方になぞらえて4つの段落を見ると、エジプトから出る、これこそハレルヤということですね。出エジプトのハレルという詩篇群もありますね。ハレルヤ。そして、主は良い方というよりは、主は聖であるというのがレビ記です。その恵みはとこしえまでというところに該当する民数記は、その愛はとこしえまでと。それで、最後のところは申命記なのですが、ハレルヤというよりはアーメン、アーメンと言えというのが申命記27章にありますね。「ハレルヤ(出エジプト)、主は聖である(レビ記)、その愛はとこしえまで(民数記)、アーメン(申命記)。」という4つの構成になっている。それは、ダビデはもちろんわかっている、主に感謝せよという言い方で、神様の契約全体をほめたたえる歌としてこの祈りを作った、書いた、指示したということにもなるかと思えます。